

毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵稅共五十錢)



二 圭 田 須 編輯
市 田 上 縣 野 長 發行
校 學 門 專 絲 蠶 田 上 所 行 發
會 曲 千 會
町 縣 南 市 野 長
社 會 式 株 關 新 日 每 邊 信 所 刷 印

支那農村經濟問題

(一)

W 生

二、封建勢力による崩壊

支那の封建制度は既に崩壊したが封建勢力は今尚依然として存在して居る、現在の支那は國際金融資本主義と國內封建勢力の二重の壓迫下に置かれた國で政治上から見れば

封建勢力の支配を受けその封建勢力の上層階級は即ち軍閥で袁世凱から吳佩孚、蔣介石に至るまで軍閥といふ軍閥は一人として支那の武力統一を意圖せぬ者は無かつた、之は支那式の一つのファツション政治の實行である又經濟上より見れば

支那の社會は國際金融資本家と國內資産家階級に支配されて居る、支那の資産家階級とは勿論金融資産家階級を指し資本經濟の生産關係から生れたものではなく封建性の剝削關係から派生した一種の畸形的發展に過ぎず而も買辦資本家、商業資本家銀行資本家により代表されて居る事により商業資本主義がその本來の機

能を發揮せんためには對外的には國際資本主義と握手をなし對内的には必然的に封建軍閥と結託し之れが政治上の獨裁となつて現はれて來ねばならぬ。

支那社會の經濟機構が商業資本主義の域を脱しない限り經濟上の獨占を把持せんがため必然的に政治上の獨裁となつて反映する、従つて商業主義社會の内包するあらゆる矛盾は其處に新軍閥をさへ形成せしめねばやまない状態にある。

兎に角商業資本主義の政治的要求が獨裁、にあり小資産家階級の政治的要求が民主に立脚して居る點より見て此の兩者は到底根本的に對立せざるを得ない、即蔣介石の獨裁と汪精衛の民主主義の對立である國民政府成立以來幾度か民主主義の統治形態が擡頭しかけても小資産家階級の持つ勢力が薄弱で商業資本社會の持つ金融的勢力の壓迫に堪え兼ね忽ち崩壊されて仕舞ふ。要するに支那社會の經濟的機構が封建性を多分に持つ所の商業資本主義の域を脱

山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成 ¥0.30
伊太利蠶絲絹業の現況の衰退原因と其修正 菅原忠治著 ¥1.50
蠶絲業法規要論 改正 ¥2.30
市田上縣野長 所行發
會 究 研 學 科 絲 蠶
(振替長野6418番)

し得ない限り民族的運動(民衆運動)の共同線は絶對に至難な事と思はれる。

かくて支那國民は質的には商業資本家階級、買辦資本家階級、銀行資本家階級に支配され地域的には支那經濟の三大分野なる長江、珠江、黄河と分たれ其内最高支配位置を保持する長江の經濟勢力を背景とする新軍閥の獨裁勢力が多々擴大すべき客觀的條件を具備して居る。

(1) 軍閥と官僚の搾取

軍閥と官僚は利害關係から連年内争を続け農民に非常な損出を與へ飢餓に瀕せしめて居る彼等は單に強迫と誘惑とで人民に軍隊を組織せしめ之を自己の道具に利用するのみならず「升官發財」の犠牲に供し同時に一般農民の血と汗を搾り取り己が榮耀榮華のために浪費して居る故に支那の賦税の増加は日と共に甚だしく其の名目も種々複雑極まるものである。

支那の地租の高率過酷なる事は世界にその比を見ず現在各地の附加税は正税の幾十倍なるを知らずといふ有様である民國十九年(一九三〇年)立法院統計處の調査せし所では地租

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機

1933年代表型

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目
特許大和式自動輸送乾繭機
特許帶川三光式乾燥裝
特許願やませほイロ
特許大和式熱湯自動還元機
特許水野式改良ロストル
特許アイエム・コールセ
特許アイエム・ストー

の種類のも多き縣は實に三〇種の多きに上り少なき所でも十二種あり附加税の多き所は二六種に達す。

廣東省開平縣 地租の種類一三種(内附加税一〇種)

雲南省元謀縣 同 一九種(同 一八種)

河北省徐水縣 同 二三種(同 二二種)

湖北省隨縣 同 二三種(同 二二種)

浙江省義烏縣 同 一五種(同 一三種)

江蘇省江浦縣 同 三〇種(同 二六種)

地租の微税額は各地により地味により高低あり。

江蘇省、蕭縣 每畝一元八〇

(二畝は上海地方一八〇坪見當)

山東省、萊陽縣 同 一元九〇

浙江省、嘉興縣 同 一元二九

河南、山西縣 同 約三元〇〇

四川省 同 二元五六

地價と地租との割合は大多數の地方は一五%の間であるが江蘇省武進縣及無錫縣地方は大休一、三%で

ある四川省 都地方及山西省河南省 地方は六分見當である。

毎畝の收穫高は蘇州、常州地方は 僅に二〇元前後が普通で河南省は更 に減じ一〇元見當山東、山西省地方 は精々七八元見當である。之れより 見れば農作物の収入の大部分は税金 として徴収されて仕舞ふ譯である。

更に地租の課率が急速に引上げられ つゝある事は又驚くばかりで光緒廿 八年(明治廿五年)の全國最良田の地 租每畝約四角(小洋四〇仙)といふ標 準から見ると過去卅年間に非常な激 徴である。

斯様に各地で勝手に逐年地租の増 徴が行はれ尙足れりとせず更に彼等 に取りては天來の妙案農民に取りて は前古比類なき暴政即ち地租の豫徴

北滿經濟發達の概要 (二)

在哈爾濱 清水 衛 敏

三、滿洲事變前

本項に於ては大正九年頃より昭和 五年八月滿洲事變勃發迄に至る約十 年間の北滿に於ける政治經濟上の變 遷を述べやうと思ふ。

支那が北滿に於ける露國の利権を 回収せんとし秘かに策動を開始せる 事は前項に述べたが、一九二〇年(大 正九年)三月に哈爾濱を中心として 勃發した東支鐵道の大同盟罷業を機 として支那は實力を以て東支鐵道回 收の擧に出で爾後幾多の曲折を経て 該鐵道の實権を掌握すると共に、東 支鐵道附屬地に於ける行政權、警察 權、司法權、土地管理權等を逐次奪 取して尙鐵道警備に當れる露兵を逐

を強制しつゝあり、張宗昌が山東省 に居りし時既に一九三三年分までの 豫徴をなし四川省鄧錫侯の駐防する 地方では五〇年後(一九八二年)まで の地租の豫徴をなして居る。劉湘、 劉文輝等も略々同様之れを見ても支 那の軍閥官僚が如何に農民に對して 過酷なる搾取をなして居るかが判か ると思ふ。

斯くて東支鐵道を中心とする露國 の政治的勢力は支那側勢力の擡頭に 依つて忽然其基礎を覆へざるゝに至 つたが、一九二〇年(大正九年十月) 所謂露奉協定成立し東支鐵道を純然 たる露支合辦の營業機關となし露國 は其他の諸權利を支那に返還した。

經濟的方面に於ける露國勢力の失 墜と、日本勢力の減退に乘じ支那側 に於ては大正八、九年頃より上海、 天津筋の巨商が進出し來り資本的勢 力を示し、一面地場に於ける華商運 動も漸次發展し來り、從來在哈爾濱 經取引を爲せる日本からの輸入貿 易に對しても、彼等は直接に日本と

の交易を開始し日本よりの輸入品は 其七割程度が華商の取扱に屬するに 至つた、邦商側の輸入貿易は上述の 通りに甚しく衰微し、輸出方面も 亦母國に需要する豆粒が邦商の手 を經る外概して不振に過ぎた。

支那側の東支鐵道關係に對する利 權回收狀況は大略上記の如くであつ たが、露國側が無力で支那側の横暴 に對して一向反抗的態度を示さざる を奇化として支那側は益々横暴を極め 鐵道局に於ける人事及業務に關して も我儘の振舞を敢てし尙露國側にて 經營せる哈爾濱電話局及教育機關迄 乘取りたるに及んで昭和五年七月所 謂露支抗爭事件が勃發し露支國境に 於て半年に亘つて兩國軍は戰爭を繼 續した。

而して結局支那軍は大敗し遂に該 東支鐵道問題は莫斯科に於ける外交 交渉に移されたが在再日時を經過し 進展を見ざる内に滿洲事變勃發し支 那側代表は莫斯科を引揚げ本事件は 有耶無耶に葬り去られた。

此時代に於て支那側が北滿に於け る政治、經濟と如何に露國を壓迫し たかは前に述べた通りであるが日本 に對しては如何なる行動を執つたか と云ふに是れ亦横暴壓迫を極め其實 例枚擧に遑あらざる所であつたが、 支那は日本の國力を怖れるが爲め露 國に對する程露骨の行動には出で無 つた。

たらしめた所謂土地問題等の北滿在 住邦人に直間接的に甚しき苦痛と損 害を與へた重大問題を發生せしめた 此期間約十箇年に於ける北滿經濟 界の推移を概括的に述べれば露國及 日本の經濟的勢力は漸次衰退し、支 那側は政治經濟上一年勢力を加へ 來り支那官民共利權回收熱に驅られ 外國の權益を蹂躪し遂に滿洲事變を 誘發するに至らしめた、而して財界

昨年來滿洲國宜撫工作のため北滿 に活躍して居る友人の直話に ……北滿の或る土民眞面目臭つて 曰く「今度滿洲國と言ふ國が出来 たぞうだ。何でも長春邊に出來た ぞうだ。一つ見物に行つて來たい ものだ。」と。

又同じく過般北滿で永く馬賊に拉致 されて居た滿鐵社員の避難日記に ……馬賊の一人に滿洲國とは何ぞ やと訊いたら ……是東西(そりや品物の名だらう) ……と。

それ處か滿洲にはマダ清朝時代と思 へて居る太古の民さへ居る。 滿洲事變以來認識不足と言ふ言葉 が流行つたが認識不足豈聯盟氏諸公 のみならずヤリツトン卿のみならず や。かく申す筆者と雖も固より方三 尺の小窓からいづも變らぬ桑園や幸 果畑を眺めて暮す身の。北滿の民 を笑へた義理ではない。言ふ處は旨

滿洲國の經濟建設工作

湯川 秀夫

○認識 難

○滿洲國經濟建設綱要

右に關しては本年三月建國一周年 に際し同國政府が發表した。一國の 具体的大計畫としては蘇聯の經濟建 設計畫にも比すべきものである。而 してその計畫の根本的主義思想は 一、所謂資本主義經濟の排撃 二、 統制經濟の確立 三、門戶開放機會 均等主義 四、日滿經濟プロツクの 提唱である(東亞六卷四號)

計畫の具体的方策は既に數多報道 されて居るから之を省くがその綱要 は次の如くである。

第一 交通施設の充實

滿洲國經濟の根幹たる農業の振興 一般資源の開發、治安の維持、商業 の隆昌、文化の向上、總て交通の發 達に俟たぬものはない。此意味に於 て交通網の完成は滿洲國建設の基礎 工作として最も緊急不可缺とされる 所である。以下各部門に就いて述べ

れば

一、鐵道

滿洲鐵道將來の總延長は二萬五千...

二、港灣及河川

滿洲國の港灣として大連、朝鮮、...

三、道路

主要都市相互間及主要都市と各縣...

四、通信

經濟幹線並に之に附隨する支線の...

五、空運

空運は日滿合辦の滿洲航空會社の...

六、都市計畫

國都新京は二百平方軒、五十萬の...

第二 農業の開發

一、農產業

滿洲國々民經濟の根幹は農業であ...

二、畜產業

滿洲國の畜産は其量豊富なるに拘...

改良増殖を行ふ。

三、林業及水産業

林業は森林の濫伐を抑制し、之が...

第三 鑛工業の振興

一、鑛業

鑛業資源を開發し基礎工業及國防...

第四 金融の整備

舊軍閥の私政は之を列擧するの煩...

第五 財政の確立

滿洲國の財政は内外に於て最も憂...

間に於て消費隱匿の弊多かりしに鑑...

右の計畫の中既に實現したものは...

會社 十三、鹽業會社(曹達工業を
含む) 十四、製藥會社 十五、牧畜
會社等があり是等は滿洲國の經營の
ものもあれど大体は滿鐵獨力又は滿
洲國滿鐵共同經營が根幹をなしてゐ
る。

申す迄もなく滿鐵は滿洲に於ける
最大の權益であり日本國家資本主義
の代表機關である故に従來通り滿鐵
が滿洲經濟建設の中心勢力となつて
ゐる。先般滿鐵が資本八億圓に倍
加したのは更に飛躍擴大せむがため
である。

統制經濟と謂ひ日滿經濟プロック
結成と言ひ關東軍指導の下に滿鐵と
滿洲國と提携合作する事が最も容易
な次第である。

滿蒙行脚

記

野口生

「世界的動搖特に東洋諸國民の生活
不安は最近に於て益々高まりつゝあ
るにも拘はらず、平和促進の任務を
以つて生れた國際聯盟は和平確立の
基準に於て我帝國の主張と所見を異
にし、現實的には却つて秩序を維持
すべき方法の樹立を誤つた列國が、
各々自國の利益を主として行動する
事かくの如くなる状態の下に於ては
國際協調に依つて一舉に世界的恒久
平和の到來を期待する事は困難であ
る。我等は先づ自らの實力を以て世
界の東方に平和の樂土を建設し、步
一步東洋諸民族の和合を圖り、やが
て世界再建運動に貢獻する以外に途
なき事を覺つた。此の世界再建運動
の第一歩は現實的には滿洲の産業建
設にあり、又その具体化の前提は日

○滿洲經濟建設參謀本部

こんな名前は無い。筆者の假稱で
あるが現在經濟建設の中心部は滿鐵
の經濟調査會である。滿鐵の過去廿
余年に亘る老成博識なる諸種の調
査資料の上に昨春來數百人の社内の
エキスパートを動員して計畫立案し
亦關東軍の諮問機關となつてゐる。
尙此の上のも一つの機關は關東軍
の特務部であつてそれこそ各方面の
權威者が顧問として居り(農業は安
藤廣太郎博士)軍司令官の諮問機關
として智囊を傾けてゐる。之れで以
つて自然滿洲國經濟建設の中心主義
及動向は察せらるゝ事と思ふ。

(八、八三二稿)

滿洲國民の完全なる提携と滿洲事情
の徹底的理解とにある。かゝる目的
遂行に致さるべき事業は多々あるべ
きであるが、純眞にして研究的であ
り且情熱的である青年學徒を多數動
員して其の先驅たらしめる事は最も
重大なる意義があるものと信ずる。
此の見地に於て關係各省、滿洲國政
府、關東軍、滿鐵等の後援の下に全
國各大學、専門學校の學生約一千名
を動員し、本年夏季休暇を利用して
別紙要綱の事業を實施する事とし
た。若し諸賢の熱烈なる賛同を得て
青年學徒による世界再建運動への貢
獻が有意義に實現する事を得ば邦家
の爲、將又人類の爲に非常なる幸福
であると考へる。云々」

徒研究團員員の趣旨である。私は本
校學生三名と共に此の行に参加して
暑中約一ヶ月に亘り滿蒙各地を巡遊
して歸つた。以下は其の旅行中餘暇
を拾つて記した私の拙き旅日記であ
る。

内地出發

七月十四日、早朝上田を發ち正午東
京驛で本校からの参加學生と落合
ふ。驛前のビルで簡単に朝食を済ま
す。もう此頃から各地より續々集つ
て來る正服正帽、卷ゲートルにリ
ツクサツクを背負つた激刺たる團員
たちの姿を見る。定刻にはまだ少し
間があるがすぐ其の足で日比谷公會
堂の集合場所へ行く。もう身動きも
出來ない程一杯だ。暫らく軍樂隊の
勇ましい國歌や滿洲國國歌等の奏樂
を聴きながら開會を待つ。やがて定
刻の二時半に指揮官の「氣を付け」の
號令が響き渡ると滿員の會場忽ち肅
然、發會式の幕は切つて落される。

先づ副團長山本忠興博士の開會の辭
に次ぎ君が代合唱、團長永田秀次郎
氏聯盟退の詔書を捧讀して更に武
辭「滿蒙の新天地、江山待つあるが
如し團員諸君努力せよ」と讀む。内
務、拓務、鐵道、文部、陸軍の各大
臣交々立つて短い言葉に熱意のこも
つた激勵を與へる、續いて來賓滿
洲國公使館代表孫錫氏、参加學校代
表林慶大總長、大毎、東日新聞社の
徳富氏等の祝詞ありて後學生代表立
ち「日滿青年の精神的結合、世界正
義の再建こそ本團の使命である」と
團員の覺悟を述べ終つて國歌「黃海
波はゆるくして」を高唱、萬歳を三
唱して感激的な場面は閉じらる。か
くて發會式は終り一同團旗を先頭に

二重橋前に行進を起し午後四時宮城
前に整列して最敬禮君が代の後團員
代表誓詞を捧讀し萬歳を三唱。それ
より隊伍を整へ東京驛に乘込みホー
ムを埋める怒濤の様な見送りの人波
にもまれて乗車「萬歳」しつかりや
れ」の嵐を浴びながらさながら出征
軍人の様な感激と昂奮の裡に午後五
時五十七分特別臨時列車で東京を發
つ。

七月十五日、午前五時限を醒ます。
汽車は琵琶湖畔をまっしぐら西に向
ふて走つてゐる。七時神戸着、直ち
に湊川神社に集合。此處で關西方面
の團員を加へ社前に皇運無窮の祈願
を籠めて此の快舉の報告を行ふの
だ。一同最敬禮の裡に神官の御祓が
行はれ副團長仁保龜松博士玉串を捧
ぐ。此の頃から細雨肅々として降り
初め社頭の線を曇らせる。團長武辭
「世界の平和人類の福祉のため——
此壯舉に加はる事男子の本懐ならず
や」と呼びかかれば學生代表「今や
青年學徒の責務今日より重大なるな
し」と團員の覺悟を誓ふ。續いて白
根兵庫縣知事、河野大毎及東日新聞
社總務等の送別の辭ありて式を終り
九時神戸第一中學のラツバ隊を先頭
に神戸のメインストリート元町通り
を大行進、歡呼の裡に神戸商工會議
所に於ける歡送を受け神戸港第一突
堤より特別船大阪商船のリオデジャ
ネロ丸に乗込む。此の時分から雨霽
れる。割當てられた自分の船室に荷
物を置いてデッキへ出るともう岸壁
は見送り人でごった返しだ、五色の
テープの波旗、花束、校歌、エール、
ワーツと云ふ歡聲、萬歳、まるで怒濤
の様な昂奮のつぼである。十一時

出港のドラに續いて正午最初の汽笛
が鳴る。テープは切れた。見送りの
飛行機の低空飛行に答へつゝ船はは
や明石沖に差しかゝる。陸上の狂亂
に比して内海の眺めは又何と云ふ靜
寂さだ。船窓に迎送する雨霽れの薄
もやに包まれた名も知れぬ大小の島
々はまるで眠れる如きである。感激
から醒めると急に空腹を覺へた。早
速食堂に入つて朝食をとりそれから
友人に、郷里の親に壯途の第一信を
書く。船は美しい内海を西へ西へと
滑るが如く進んで行く、やがて夕陽
が船首から消へて船上の第一夜が訪
れて來た。十時の點呼がすむと早速
ベットにもぐり込む。

七月十六日、ドラの音に午前四時
起、今朝は門司入港のため特別こん
なに早く起きるのだ。揚子をくわへ
てデッキに出て見れば船はもう門司
港沖に差しかゝつてゐる。六時岸壁
に着く、七時から十一時まで自由上
陸許可、バスに乗つて門司の町を一
周し果物等買ひ求めて船に歸る頃九
州、中國地方からの團員百名位乗船
して來る、我等は拍手を以て此新し
い仲間を迎へた。正午出帆、愈々之
で内地とは暫らくの御別だ。四時頃
左舷に豪岐、暮れ方右舷に對馬を見
る。玄海灘の荒浪も一萬噸の大船に
は一向にお感じない。夜はレコード
で國歌及滿洲國國歌の練習をやる。

七月十七日、午前五時起床、船は朝
鮮の西海岸を走つてゐる。時折切り
立つた様な岩の小島が見へる、一同
デッキに集合して遙に東方皇居を遙
拜しそれから朝の体操をやる、これ
は精神体操とか稱し本團獨特のもの
で其の號令が仲々奇抜である。曰く、

A
豫令、臂を天下に張れ（手を腰に當てる）、
運動、(1)仰いて皇道精神を思へ（頭を前後に曲げる）、
(2)世界を睥睨せよ（頭を左右に廻す）、
(3)天地を俯仰せよ（体を前後に曲げる）、

B
豫令、脚を大地に踏張れ、
運動、(4)天を押せ、
(5)腕を大陸に揮へ、

C
運動、(6)天地正大の氣を吸へ（深呼吸）、
午後にはデツキで剣道、相撲等をやる。激烈たる若者の元氣ははち切れぬばかりである、夕食後食堂デツキ談話室等で學校や所屬部隊等の懇親會や顔合せ會が催される。自己紹介に續いてお國自慢の小唄、手拍手、蠻聲、等々船中涌き返る様な騒である、明日は愈々大連上陸だ高鳴る胸を押へて十時就床。（未完）

開港拾遺集 (四)

横濱 正木章三

二月十日會見の事

Conversation being thus stopped and no signs of any refreshment appearing, there was nothing else to do than to go. (註) 會見は終つたが茶菓の接待の様子も見えないので、最早歸へるより致し方無かつた。之は第一次の浦賀會見の時のペルリ方の感想であつたとの事で、第二

次會見の折には手ぬかり無く御馳走を用意して充分に感情外交の方面に備へた様であります。
尤もこの二月十日（嘉永七年）の會見は、林大學頭對ペルリ提督の花々しい一騎打だつたのです。平穩には見えて居ましたが、沖には本牧の守備に當つて居た松平相模守の人数が數百艘出て居り、いざと云へば應戦する覚悟であつたらしく、會見所の周圍にも小笠原左京大夫の兵が堵を作り、眞田信濃守歩騎砲混成で幕營

拜啓
仲秋の候條御清祥の段與奉慶賀候陳者小生儀今回思ふ處あり十五ヶ年の官界生活を捨て更生の計畫樹立致度發心致候に就ては何卒倍舊の御高庇賜はり度在任中の御交誼を謝し併せて此段御依頼致度如斯御座候
藤井 料
奈良市水袋町二六
昭和八年十月

かくれて居たとの事で、更に佐久間象山は維新にあつて成行を注視して居たのであります。
兎も角この時の林大學頭の外交辭令振りは相當進歩的なものであつたらしく、幕府全權の巧妙な議論、論理的な意志實行等武力以外の知的外交の性質も優れて居ると云ふ點に就てペルリも新見解を披いたのであります。尙この日の應接には、味噌吸物、さしみ、有平餅、かすていら、等と云ふ様なものが出され、膳に添へた箸の用ひ方がわからぬのでナイフやホークを出して吸物椀の中の魚を切つて食べた等と記さ

れてあります。
又「日本人亞墨利駕人應接之圖」と云ふものこの日寫し取つたものとの事です。

淺雲錄 (三)

曲千生

一、綠陰慢語

二、なり秋

なり秋となつた、母校學園の樹の間に植ゑられた果物が一齊に熟れて來た、果樹の數の多いこと、其の種類の豊富なこと等も本校のユーモラスな特色として大いに自負したい、此等の果物の魅惑は上田生活の忘れがたない追憶の一つであらう。
學生は暑中休暇や校外實習のため長い間其の學校を留守にするが九月になつて新學期が始まるといそいそと母校に歸つて來る、そして第一に生彩な眼をそぐのは此のなりづもくの上である、袂れる時には未だ幼稚な姿であつたものが今は如何變つて居るか？そして此等の疑問を實地に檢照し色付いた秋の装ひを眺めて安堵の胸をなで下ろしつゝ大に食指を動かすのである。
特に禁斷と云ふ程でもないが公然とは獲ることが出来ないだけに尙冒險的な興味を手傳つて人目をしのんだ攻撃が勃に開始される。

柿は木に生つたまま菌型の跡がありありと讀めたり胡桃は中の實が辛やく白い汁をふくかふかないうちに石礫を鑿つて醜い顔を天空に曝したり櫻桃は樹では遂に赤い姿を見せずには了い、まだ青い葡萄でさへも「初

ちぎり」の瀟瀟みにあつて棚のあたりには玉碎すると云ふ情景を點綴するのである。
柿はかなり澤山植ゑてあるが多くは熟柿である、熟柿であつても一度は初年生の齒にかゝる、そしていやと云ふ程彼の舌に咬みつく、だが甘柿も無いでは無い、其の所在は職員でもはつきり知らないが學生は退に心得たものである、軽く色付き始めると誰かしら訪問を怠らず決つし木の上で總身を心地よく熟れさせやうなへまや手落ちをしやしな

い。校長室の横手にあるあの高い栗の木一之は知らない人も多からうが「でさへどこから運んで來たのか長い桿を持ち出して來て二三人がかりで叩き落とす、窓越しに筒ぬけに校長先生が其の全景をキャッチ出来る程の大冒険だが。
しかしかゝるナンセンスはそれが非常に大がかりで無い限り黙認されて學生同志の危い均衡を保ちつゝ公平(?)に分配されるのだ、小使等は戦場の清掃にいさゝか不平を訴へもしやうが。

葡萄 秋の果物の先驅はまづ葡萄から始まる、學校の代表的な葡萄棚は病理部である、本年は早敷に遭つて收穫が非常に少いそう、大粒なサファイヤーが紫水晶に變つて來、葉かげに潤つた顔を出しはじめると敏感な學生の好奇心を唆る、あの高い棚の下にノートをこ脇に抱いた儘葡萄の發散するイットに頻りにウインクを交はす、所があの棚はすばらしく高いからいかんとも手の下しやうが無いのだ、仰むいて愁しそうちに眺めて居る點景は確かにイソップのそ

れである。
もともと此の棚は病理學實驗室に直射する日光を避けるために造られたものである、屋根の高さ迄高くされてあるのも此の理による、之を培養するために先生方の少なからぬ努力が拂はれる、剪定、數回のポルドー消毒、害蟲驅除等々、そして一齊に收穫して一々各教室迄几帳面に分配して下さる。學生も勿論其の御馳走に預るのでが冒險的雅氣棄て難いものと見えてあの高い屋根に登つて大がかりに無斷收穫する手ごはいい悪性の強行も潰せられると云ふことだ。圃場にも少しではあるが棚がある、食べ棄てた葡萄殻を追ふて足取りを拾つて見ると運動場を突つ切つて修已寮へ自ら徑をなす、朝の散策の手すさびと頷かれる。(つづく)

大島紬に就て

本間 久

大島紬と示ふ名は廣く世間に知られて居る様であるが織物としての價値に就てはあまり知られて居らぬ様であるし此れから需要さるゝ時期ともなるから少しく述べて参考供し様と思ふ、尤も蠶絲關係者は概して製品たる一般の絹織物に就てもあまり無關心で知識が薄い様であるがもつと深く知つて居る必要があると思ふ、實は私も鹿兒島に來るまではあまり織物に關心を持つて居らなかつた故紬と地との間に茶味を持つた絹織物はすべて大島と思つて居つた様な譯である然し來てから色々研究して見ると類似品が全國に澤山あることが判つた、例へば村山大島、長

井紬、長良大島、伊勢崎、桐生等より出来る銘物大島等は所謂模倣品であつてしかも大島の名を冠して販賣せられて居るため買った多くの人は本場大島と思つて得々として着用に及んで居る、そこで此等類似品でも本場物と何等の遜色がないかと云ふに大にありて全然異なるもので大島としての價値なきものである、それでは如何なる點が價値あるかと云ふに一言にして云へば本場大島は染色が薬品染でなく木を煎んちて得たる自然の染液で染めしかも泥に浸漬して得たるあの濃黒茶色と緋の足(足とは黒色の部分と白くぬけた緋との間に染液の滲て出来た茶色の部分)並に整然と合つた活き／＼した緋の點等にあるので本場物に少しく經驗ある者なれば一見して判別出来るのである。

此等の點より察して如何に本場大島が大島獨特の織物で他機業地の追従を許さざるものであるかがわかると思ふ、即ち鹿兒島特産品である天下に誇り得る所以である、依て以下原料及製織工程に就て簡単に書て見る原料は本来紬織なる故紬絲を使用するのが本當かも知れぬが現在は玉絲と本絲生絲とが使用されて居つて他の織物繊維は全然使用されて居らぬ、紬絲を使用したのは極く昔で縞織物、黒無地織物等を織つて居つた時代の様であるよく人絹が使用されては居らぬかなどと照會が来る事があるが使用して居らぬのが本當である實際使用したくとも染色關係からして全然使用出来ぬのである、若し本場物に人絹物があつたなら懸賞もので全然ない事を命を懸けて保

證する、本絲製は紬と云ふ感はないがすべ／＼して居つて緋が實に精巧に出て居るから非常に綺麗である、染色は地も緋も全部チチ木(學名シヤリンバイ暖國に成育する樹木)の煎汁と鐵分を含む粘土質の泥とを以て交互に數十回染色してあの言ふに言はれぬ濃黒茶色を得るのであつて早く云へば昔の婦人が齒を黒く染るに用いたオハグロと同一原理であるの色が出来ると考へればよいのである、次に緋の製法であるが之が非常に面倒で圖案を見ながら専門家が緋にすべき絲を縮機にて縮めて縫製に出来たものを前述の方法に依り染色して先きに縮めた部分(此の部分)が緋となる)を解くして緋とするのであるが此れこそ大島紬の生命であるから相當經驗の積んだ者が苦心して製作に従事して居るのである

製織は簡單なる手織機を用ひて緋を合せながら織るのであるが之が又難しいもので相當の熟練工でない上等な織物は出来ないそれで皆養成に苦しんで居るらしいのであるしかも三寸位織つては針で緋を整然と合せ／＼織るため一匹織るにも簡單な緋で十日少し面倒なものになると一ヶ月位掛るのは珍らしくないのである今日の様に動力を使つて一日幾匹も織上ると比較すると神代時代を思わせないでもない兎に角緋によつて色々な模様を織出すと云ふ事はなかなか出来ぬ事だ世界廣しと雖も唯大島のみが出来ぬ技ではないかと思ふ實際大島紬の精巧なものは立派な美術工藝品として觀賞すべき價値あるもので着用としては勿体ない様に思はる、大略以上の様な方法で製

顔忘れ症

千葉 高 島 生

品となるのであるが此れで大抵本場大島の概念は得られた事と思ふ序に今後大に皆さんが本場大島を着用し觀賞さるゝ様鹿兒島縣のため提燈を持つて撰筆する

かつて面識あるには相違ないが、その誰であるかを想ひ出せない時は、まことに氣持の悪いものである。

殊に相手の人がコツチをよく知りぬいて居て、なれ／＼しく話しかけられる時には、話のバツを合せるのに一方ならぬ苦心の要るものである。ソナ場合、相手の素性を知らるために、搦め手から打診を試みてうまく成功する場合もあるが、却つて話の辻褄が合はなくなつて、トング處で馬脚を露はすこともある。

面識はあるが素性が想ひ出せない程度ならまだよい方で、時としては全然見當のつかない場合があつて、「先方から先日は失禮しました」ナツて言はれた時、全く面喰つて了ふことがある。又その反對に、折角コツチが敬意を表しても、相手に自分の誰であるかを通じない場合には憂鬱にならざるを得ない。

世間には一度會つた人の顔や名前が決して忘れないと云ふコツチの人があるが、此種の人には人心を吹攪するに便利である。一兵卒が將軍から「オイ上田！」とやられた時には、ドンナに親しみを感ずることか。然

るに私は、この人の顔を憶えることが頗る不得手で、時々失敗する事がある。かつて農學校の教員をやつた時代にも、生徒の顔を憶えるのに、どの位苦心したか分らない。殊に初老の域に入つた近頃では、この傾向が益々甚しいやうな氣がする。

先日千曲會東京支部總會のあつた時、僕の隣りに座を占めた同窓の一人を誰だか想ひ出せないで困つた。正面からきいては親しみを失ふから何かヒントを得たいと機會を狙つて居ると、談たま／＼蠶絲學雜誌の事から蠶絲總覽の事に及んだ時、この君が「僕の役所では全職員が讀んで居る」と言つたので、之をキツカケに打診にかゝつた。まづ「君の役所と云ふと？」ときくと「山梨の蠶絲試驗場サ」ときたので、「ア！君は栗原章君だつてナ」と言つて大笑した事である。

先年前橋の國立蠶絲試驗場に、關東府縣の蠶絲業技術官會議があつた節、私も出席すべく前橋驛で汽車を降した。すると改札口に一人の紳士が待つて居てなれ／＼しく「遠路御苦勞様！」と挨拶して、會場迄案内して呉れた。私はその誰であるかを知らないで、恭しく名刺を出して敬意を表した處「オイ、他人行儀はよせよ」と來た。そこで「お見それ申しましたが大ナタ様で？」ときいてみたら「冗談ぢやない、白澤(幹)だよ」と言つて肩をたたくれた事がある。(白澤君なら熟知の間柄である。

又コンナ事もあつた——汽車の中で一人の百姓風の男から「先生！先日は御苦勞様でした」と挨拶されたが、さて誰であるか想ひ出せない。仕方ないから「下ナタ様で？」ときくと「成田です」との答。それでも未だ成田の者と云ふ意味か、成田と云ふ姓か判明し兼ねて居ると「あの時の御講演は大分タメになりました」とオ世辭を言はれたので、漸く解せた。それは二三日前講演に行つた或る養蠶實行組合の組合長成田氏で、晝飯を馳走されたり、緋沼の鰻を土産に呉れたりした人である。先方では定めし御馳走がひのいな奴。と思つた事であらう。

八百屋の店先に並べられた西瓜は、どれもこれも同じ格好をして居て區別がつかない。それと同じやうに私にはどの人もこの人も同じ顔に見えて、餘程の特徴のない限り區別がつけ難い。(その癖異性の美醜には頗る敏感で途上で一寸すれ違つた別嬪の姿など忘れかねて夢にまでみると云ふ矛盾があるけれど)故外山博士は一頭一頭の特徴を捉へて、數百匹の蠶兒の中から數日後に再び同じものを拾ひあてる事が出来たと云ふが、自然科学の權威者たるにはこの位の觀察力がなくてはなるまい。この意味に於ても私は落第である。

そこで私は人の顔を憶えるのに相當苦心を拂つて居る。そしてその最も効果的なのは、似た顔を揃へて憶える事である。似た顔と言へば、蠶絲業界では農林省の明石蠶業課長、

と京畿の吉村教授、石渡博士と神奈川蠶絲試の福田場長は全国的に有名であるが、我が同窓中では、農林省繭絲課の小平君(舊姓武井、繭13)と繭絲の光發行所の依田君(繭14)、母校の井上教授と共榮社の丸山君(繭1)針塚校長と前蠶絲局長の入江氏などの組合せはドンナものだらう。白澤君は一高の片山教授(中學の同級生)栗原君は農林省蠶業課の下田技手(東蠶出)に似て居るから、もう何處で會つても大丈夫である。

斯く言ふ私に似た者が、今千葉市に二人居る。一人は商工水産課長の岡事務官、いま一人は新聞記者の金山氏。今日も今日、役所へ似顔かきかやつて来たので、大枚十錢を授じて私の顔をスケッチさせ、之を岡氏にみせたら「金山君だ」と言ひ、金山氏にみせたら「岡さんぢやないか」と言つた。時折途上で見知らぬ(?)人から挨拶される事があるが、それは私を岡氏の何れかに間違へたものか、それとも私の顔忘れ症によるものか、何れとも断定に苦しむ次第である。その内に三人仲よく嬉んで寫眞を撮つてお目にかかせうか。

夏の日記

確永 茂

空が高くなつて涼しさが加つて来ると闘争的な夏が思ひ出される。いま僕は夏の日記を引き出して見てみる。勿論日記にはところどころしか書いてないが次のやうな部分を發見した。

八月×日 前の森で蝉が鳴いてゐる。ジ
 1ジ1鳴いてゐる。涼しいわけではないが、夏として見れば涼しい風の吹いて通る日だ。日曜らしい日曜をしたことのない僕には、今日はよい日曜である。
 八月×日 この間は防空演習で、夜になると電燈を消したり、電燈へ目くらしをして讀みものをしたり、書き物をしたりしたが、それが済んで了ふと気が晴々した。「電燈を消して下さい!」
 八月×日 僕は里芋そのものを餘り食ふ気になれない。食べたいもの、食べて見たいもの、としての中へ這入つてはをらぬ。然し里芋が如く植ゑられてゐるのを見るのは大好きだ。里芋の畑の傍を通るといつも僕は立ち停つて見てゐる程だ。
 八月×日 今年になつて田舎からぬえやが来た。仕事をすることは餘り好きらしくないが、妙に何かを家の周囲へ植ゑたりなどする。玉蜀黍を植ゑたり、豆類を蒔いて大きくしたりする。このぬえやが何處から種子を見つけて来て里芋を大きくした。その里芋は非常に成長していま僕が物を書いてゐる窓の外に笑つてゐる。あのユサユサした厚肉の大きな葉を開いて、風を受けては揺れ動くのだ。僕は物讀みで疲勞すると、よくこの里芋の葉を眺める。朝起き上つてはこの葉を眺める。朝め先から歸つて来て服をぬいで裸になつてはこの葉を眺める。さうだ。僕はおそらく一日中には數回この里芋の葉を眺めるだらう。
 殊に夏の夕暮れなどにこの葉を眺めることは好きである。用事が終つてフラリ外を歩いてゐる時に、この里芋の葉が招いてゐる風情を享樂するのは非常にいい感じがする。照りつける陽の光にも、秋らしいものを感じる。今日は八月の十四日。八月の新暦で盆をするところなら盆の中の日だ。
 八月×日 初めて雑誌の編輯といふことをやつて見た。なかなか手の掛る仕事だ。だが校正が終つてその結果がどうだらうと考へながら雑誌の顔を見る迄の心持は非常に楽しみなものだ。心配でもある。出来上つて了ふとホットする。
 八月×日 今年の夏は、つい這入り度いと思つてゐた水の中へ這入らずに終つて了つた。忙しかつたのだ。いまになつて見ると惜しいことをしたと思ふ。来る年も来る年も、さうした忙しさのために追れるのだらうと考へると、静かになつて見たい気が頻りと動く。
 八月×日 今居るところは静かで、しかも空気がいいと思はれるので引越して来たのだ。引越して来てから約一年半ほどになる。その頃隣空には(家主は同じ)若い夫婦がゐた。フ라우が胸を病んでゐたやうだ。勿論寢通しに寝てゐるといふのではないが。
 その人達が引越して行つた。さうして約一ヶ月空家が續いた。この間又寒つた。今度は主人の方が毎日、日光と新鮮な空気に親しんでゐる様子だ。この人も胸が弱いのだらう。
 九月三日 非常に蒸し暑い。裸でゐても少し何か仕事をしようものなら、玉のやうな汗だ。降りさうで降らぬ天氣は誠に気分が悪い。降るなら降つて了へ!と嗷嗷り度くなる。
 九月八日 この祭日だ。近くの空地へ土俵が出来た。午後五時頃から子供供力があつた。角力が終ると「東京躍」だ。どこから集つて来るのか知らぬが、七時頃になると澤山の人が集つて来る。男も女も、子供も。さうしてこれらの人々が東京躍りを躍るのだ。九時頃になると相當廣い空地が塞がつて了ふ。
 躍り疲れた人々は「躍りの環」を離れて休息する。そして又躍るのだ。

かうした躍りは僕の近くのみの出来事ではない。今東京では、至るところの空地や廣場で殆んど毎晩のやうに東京躍りが躍られてゐる。しかもこれから先、いつ迄この躍りが躍られて行くかわからない程だ。
 × × ×
 果物屋——果物屋をのぞいて歩くことを僕は大好きだが——の店頭はいま賑やかである。無花果や、柿や、

ブドウや、苺やが首を並べて買ひ取つて呉れる人を待つてゐる。僕は時々店頭からこれら果物を買つて来て食ふ。中でも僕は柿が大好きなで、時々柿を買つて来ては食ふ。
 × × ×
 支那そば屋がチャルメラを吹いて通るのはこれからだ。早く来て呉れば可い、と僕は心待ちに待つてゐる。(一九三三・九・二七)

二十五周年記念

昭和十年には母校創立二十五周年祝賀式並に記念事業を行ふことになつて居ります。昨年の代議員會に於ては本年の代議員會迄各支部で研究して本會へ報告することに決定して居りました。本年の代議員會も目標の内に差し追つて居りますので各支部から現在迄報告のあつた案を一括して御參考迄に御報知致します。

一、既定事業計劃

- 1 勤続教育職員並に使用人に記念品贈呈
- 2 物故教育職員同窓生並に使用人追悼會
- 3 記念講演會開催
- 4 講演集又は記念論文集の發行

二、未定事業

- 1 千曲會館、千曲會事務所等の建設 費用は三千圓より二萬二千圓の範圍
- 2 奨學資金、育英資金等 費用は一萬圓より二萬圓の範圍
- 3 本會活動資金の基金積立
- 4 二十五周年記念資金の造成
- 5 共済組合制度又は弔慰基金の特設
- 6 全國蠶絲業博覽會開催(上田市)

3 特志家の寄附を仰ぐ
 以上の中の一の既定事業計劃は何人も異論なきものであります。二の六項目、三の三項目は相當御研究を煩はすものと存じますから充分御討議の上支會で取り纏め御報告を願はるれば寔に好都合であります。
 鹿兒島高等農林學校は本年度に於て二十五周年を迎ふるが故に本年度に於て記念會規程を設け夫々準備に着手して居ります。其の豫算を御參考のため御報知致します。

- 一、收入之部 總收入
 一金參萬四千圓也
 內譯
 金貳萬八千圓也 會員贈出金
 金六千圓也 基金より流用
 一、支出之部 內譯
 金貳千五百圓也 記念論文集發刊費
 金八百五十圓也 贈呈記念品費
 金壹百圓也 追悼會費
 金壹萬貳千圓也 記念會館建設費
 金壹千圓也 事務所費雜費
 金壹萬七千五百圓也 二十五周年記念資金

- 一、釀金方法
 一人一口以上釀出一口は金五圓(以上)

九月のかほり
 一、 橋 人 生
 こぼろぎがないて夏が終る。
 × × ×
 舗道の隅のアスファルトの下でなく。街路樹のポプラの葉が一枚面をかすめて夏の暮を知る。こぼろぎと舗道とアスファルトと街路樹で秋の近付くを知る。
 × × ×
 高原では澄み切つた空に淺間の呼吸が浮き出て秋を知つた。それから秋の表象に星が八ヶ岳の頂上であつた。
 × × ×
 朝の電車の中で。
 「いや、百歩焼けましたなア」

「さう言ふ貴君も
 「二、三日でこれですよ は、は、
 「御子供さんも見ものでせうなア
 「焼けて黒くなるのが嬉しい事ですか
 「全く
 「時に娘さんは 愛子さんと申しました
 「同然よく焼けてますよ この頃の娘は
 「どうも
 「いや その方で無く
 「と云ふと
 「御縁談がおありの様でしたが
 「あア 有難うございます 海水浴で見
 「合をやりまして無事……
 「海水浴で? 成程考へましたなア 現
 「代的のことをやりましたなア
 「は、は、自分でこりましたからなア
 「
 「銀座を歩く。新宿を歩く。何所でも夏
 「の話が街頭にこぼれる、断片的に行き交
 「ふ時、又お伽話の様に隣りのボックスで。
 「こゝいらで會はないかなア
 「駄目だらふよ
 「聞いて置くんだったなア あれ迄にな
 「つたんだもの
 「あれまでつて 君!
 「うん 實は言はずに居たんだけど、あ
 「の晩儀散歩に出たらう。いゝ月夜だッ
 「たんだぜ。舟べりが青白く輝いて、
 「その舟の中に偶然居たんだよ 俺の行
 「くのを待つて居る様に。
 「で、それから
 「種々話したさ
 「住所聞いたかい
 「それが……
 「一体何を話したんだい
 「昔々王子様とお姫様が路駄で砂漠を旅
 「行した話さ。恰度あの邊には砂丘があ
 「るものだから
 「で彼女何とか言つたかい
 「うん いゝお月様ねつて
 「それだけか
 「うん 僕もいゝ月だねと言つた
 「チエツ 馬鹿々々しくつて聞いて居ら
 「れん。僕は先へ失敬する。會つたら宜
 「しく言つてくれ。それからこれは余け
 「いな事かも知れんが夏の夢はその儘に
 「しておいた方が秋の散歩のためによか

アないかね
 「残暑酷しいなア
 「うん
 「うんぢや無え何か借れよ
 「理由が無えよ
 「ばつくれるない 言ふぞ
 「何をさ
 「彼女訪問の件さ
 「俺の夢、こわすのか 借るなんて事で
 「君のクチを縫ひ度くないよ
 「夢とは
 「夢さ。峠を越して谷を上つて彼女に會
 「つて来た事余体が夢だ。もう二度と同
 「じ条件では會はないだらうと云ふ點
 「で、又行くかも知れない行かないかも
 「知れない。行つたとしても其時は親し
 「く名を呼ぶことさへ許されぬかも知
 「れない。又想出に耽る丈で追返される
 「かも知れない。止めやう だがあはれは
 「夢さ。美しかったと思つて居ればよい
 「夢だよ。
 「
 「九月の朧月が眞綿につつまれて、もの
 「うげに窓をのぞく、流むだ夜あらゆる幻
 「想が生きて、踊り出て来て、生存と云ふ
 「根強い意識も何時しか儼然して仕舞ふ。
 「秋と云ふ姿。悲哀か、清麗か?
 「勝戦し賃を受け、慰勞の盃を傾むける
 「時秋なれば高原林間や美しく、敗戦失位
 「し身六尺に足らざるも天地尙狭く激流奔
 「走の河岸に遺棄し將に生命を断たんとす
 「る時秋なれば落葉飛雁や悲し。
 「汝この秋如何と問ふ。
 「今宵この月を眺めあらゆる可能な想像
 「の流れに身を投げ出し、月梢の鐵欄を忘
 「れた今唯美しい初秋を感じるのみである
 「
 「秩父に旅す。夏の想山の唯一。
 「山靜かなりけり。川清く流れぬたり。
 「都の宴に飽きたる吾は唯松の緑にしばし
 「去り得ざりし。編して秩父旅日記あり。
 「中に一人の少女の事書きありたり。その
 「己が心今吾知れり。
 「
 「秋だ秋だと叫んで見てもどうも今日は
 「暑い。残暑なら残暑らしく夕方になつた
 「らさつと引上げればいゝのに圓々しく
 「十二時頃まで構へて居る。高氣壓の威力

が發願された結果に依る人ださうだが有
 「難くない暑さだ。確永峠で数年前の今日
 「涼風に肌を酒した事があるがあの気分は
 「未だ忘れぬ。
 「氷水代后一(〇)分として one night と
 「つておく。
 「
 「例の暑い(前號で紹介した)の總計が
 「八圓。これを一人で處分すると相當のも
 「のなんだが二人で食むんだから心細い
 「次第だ。助成金交付申請書は相手のもの
 「だそんな規則はない。がその方になると
 「頭が直ぐ更生するのが居るからその内に
 「眞珠培養的増殖をやらせよう。八圓と言
 「へば一回五錢だから一六〇圓だ。M技手
 「の二四回を「Z」に小生が七回で第五位
 「である。一番の出し頭は床柱をかつぐ事
 「になつて居る。
 「
 「アパトに三ヶ月も居ると古狸の方で
 「ある。氣の持ち様で住良しものだ。
 「月に雲が戯れられる。澄切つた空の眞
 「只中で。秋のアパトは感傷的だ。
 「古狸も物干台で腹でもたゝくとするか
 「な。——一九三三・九・一——

NEWS

放送局

故三吉先生の銅像移轉並に七回忌法要執
 「行 十月一日上田市公園に於て諸事盛會
 「裏に執行されました。銅像の位置は公會
 「堂正門の南芝生で現在の入口から眞正面
 「に其の英姿を仰ぐことが出来公團隨一の
 「適所と目されて居ります。蠶業學校が染
 「屋台下に移轉して後七ヶ年、淋しく権現
 「坂上に埋もれて居たものが今同歴史的に
 「も由緒深く又最も眼につき易い松尾城頭
 「に遷つたのであります。之で漸く先生の
 「遺徳も善く萬人欣仰の標的となることが
 「出来ました。公團の風致にも一偉彩を添
 「えたので一般に非常に好評であります。
 「銅像には針塚先生の撰文揮毫になる移轉
 「の辭が銅板におこされて取りつけられ一
 「層光彩を放つて居ります。法要も來會者
 「があの公會堂に充つる盛會で、母校から
 「教職員千曲會員殆ど全部出席し御焼香致
 「しました。
 「劍道部東京遠征 九月八日東京に於て東
 「京高嶽と對校試合を致しました。紅白勝
 「負に於て敵に不戰優勝五人を残し個人勝
 「負に於て敵に六勝せられ何れも敗戦の苦
 「杯を嘗めました。柔剣道は母校の特色あ
 「る競技の双璧として自他共に許して居た
 「のですが、茲に激勵應援を賜つた先輩諸
 「
 「坂本孝子氏弔慰金募集
 「本會々員坂本孝子氏(絲八)豫
 「而御病氣の處養生不相叶九月
 「四日遂に御逝去被致候間此段
 「本紙上を以て及御通知候也
 「追而有志弔慰金は十月末日
 「迄に取纏め遺族へ贈呈可致
 「候間便宜上振替口座東京第
 「四三三四一番へ坂本氏弔慰
 「金の旨御明記の上御拂込被
 「下度候
 「昭和八年九月十五日
 「上田蠶絲專門學校
 「千曲會
 「
 「竹内清氏弔慰金募集
 「本會々員竹内清氏(蠶六)豫而
 「御病氣の處養生不相叶十月二
 「日遂に御逝去被致候間此段本
 「紙上を以て及御通知候也
 「追而有志弔慰金は十一月末
 「日迄に取纏め遺族へ贈呈可
 「致候間便宜上振替口座東京
 「第四三三四一番へ竹内清氏
 「弔慰金の旨御明記の上御拂
 「込被下度候
 「昭和八年十月十五日
 「上田蠶絲專門學校
 「千曲會

した、弓道は庭球と共に高嶽の得意とす
 「る特色であります。
 「野球部の活躍 本年の野球部は比較的優
 「れ相當活躍致しました戦績は左の通りで
 「あります
 「九子農商 九對五 負
 「上田中學 十三對九 勝
 「小諸商業 十三對八 勝
 「小諸商業 十三對八 勝
 「山梨高工 五人對三 負
 「松本高嶽 二十對九 負
 「松本との試合は氣分的のコンディションに
 「恵まれず内外野の守備に破綻を來し上げ
 「ずも哉の點を献上して大量的差異を生じ
 「たのであります。
 「柔道部對校試合 九月十五日東京高嶽の
 「柔道部選手を母校に迎へ對校試合を行ひ
 「ました。紅白試合(九人)に於て四人残り
 「個人試合に於て五對一と云ふ戦績を残し
 「て見事に勝ちました。九月三十日長野師
 「範と紅白試合を行ひましたが之も三人不
 「戦を残して母校の勝となりました。母校
 「の龍兒柔道部は相當なものです小松と云
 「ふ猛者が來年度も残ることになつて居ま
 「すから母校のために氣焔を吐いてくれる
 「と思ひます
 「陸上運動會 第三日曜日たる本月十五日
 「には陸上運動會を舉行致しました。學生は
 「放課後應援團歌と太鼓の音で校庭を賑は
 「して居ります。東京音頭を取り入れたあ
 「たり三三年型と申しましたやうか宛に角應
 「援團も上田の一名物となつてしまいま
 「した。
 「千曲會日誌
 「九月五日 横濱生絲検査所在勤の坂本孝
 「子氏(絲八)逝去につき木内神奈川支局
 「會長を経て遺族へ弔電を渡せり
 「九月八日 内務省警保局へ蠶絲學雜誌出
 「版手續省署願提出す
 「九月十八日 母校創立二十五週年記念祝
 「賀式の件に關し第三回協議會を開催諸
 「般の研究をなせり
 「同日 故渡邊隆平氏の遺族へ有志よ
 「り送られし弔慰金三十一圓五十錢を贈
 「呈せり
 「九月二十五日 振替貯金口座加入者名義

